

# 欧米における「忠臣蔵」のイメージ形成

— 大石内蔵助の人物描写について —

カワウチ ユウコ  
川内 有子

## はじめに

現在も日本人に「忠臣蔵」の愛称で親しまれている元禄15（1703）年に起こった赤穂浪人による吉良邸への討ち入りは、事件直後から多くの反響を呼び、史実と虚構が入り混じった状態で受容されてきた<sup>①</sup>。一方、海外への紹介や翻訳も開国直後から行われ、こうした国内外から寄せられる関心は、日本人にとっても認知されていた。明治の終わり近くに盛んになった、「忠臣蔵」の虚構よりも史実の側面を追求する流れのなかで明治42（1910）年に出版された福本日南の『元禄快挙録』の序文は、当時の「忠臣蔵」の受容の広がりについて、その冒頭で言及している。

赤穂浪人四十七士が復讐の一挙は、日本武士道の花である。従つて之に関する伝記の類は汗牛充棟とも謂ふ可く、普く之を蒐めたら、立派な図書館を作ることが出来よう。其れだけ多く芝居にも演ぜられ、ば、講談にも上せられる。小説にも入れば、浪花節にまで謡はれる。支那にも聞え、欧米にも伝はつて、欽仰せぬ者は無い。<sup>②</sup>

この序文からは、明治40年代当時の赤穂浪人の討ち入り事件の受容がいかに幅広いものであったかを知ることができるが、この引用部について、最も注目したいのは、福本が「日本武士道の花」である「忠臣蔵」は「支那にも聞え、欧

米にも伝はって、欽仰（きんぎょう）せぬ者は無い。」と記していることであり、20世紀の初めには、海外における「忠臣蔵」の受容が「忠臣蔵」に新たな風格を与える要素として認識されるほどであったという、この記述からうかがえる事実である。

### 1. 1915年までの英語圏における「忠臣蔵」の受容

西洋社会に初めて「忠臣蔵」の紹介を行ったのは、オランダ商館長であった Isaac Titsingh (1820) であると言われている<sup>③</sup>。彼は歴史事件としての概要をほぼ忠実に記述しているが、あくまで、その関心は綱吉の治世下に起きた一事件としてのものに過ぎなかった。討ち入り事件が日本人に与えた影響については、“Les militaires, pour rendre hommage à leur fidélité, vont encore aujourd’hui visiter leurs tombes, et y faire leurs prières. (兵士たちは、彼ら（引用者注：赤穂浪人たちのこと）の忠誠への尊敬の印として、いまだに彼らの墓を訪れ、その墓前で祈る。)”<sup>④</sup>と述べるにとどまり、特別に大きな関心を寄せている様子はない。「忠臣蔵」を日本人の精神性の重要な要素として捉える傾向は、1863年に出版された Ratherford Alcock の ‘*The Capital of Tycoon* (『大君の都』)’以降に見られるようになる。Alcock 以降の英語圏における「忠臣蔵」受容の一区切りを、ひとまずイギリスの桂冠詩人 John Masefield による「忠臣蔵」の翻案演劇の成立<sup>⑤</sup>までとして考えると、主な紹介・翻訳として次のようなものがある。

Alcock, R., (1863), *The Capital of Tycoon: a narrative of three years’ residence in Japan*

Mitford, A. B., (1871), *Tales of Old Japan*

Dickins, F. V., (1875, 1880, 1910, 1912), *Chiushingura or The Loyal League : a Japanese Romance*

Saito, S., and E. Greey, (1880), *The Loyal Ronins*

Murdoch, J., (1892), *Scenes from the Chushingura and the Story of the Forty Seven Ronin*

Inoue, J., (1894 [1st ed], 1910 [2nd ed], 1937 [3rd ed]), *Cshushingura or Forty Seven Ronin*

Masefield, J., (1915), *The Faithful*

英語圏から「忠臣蔵」に強い関心の目が向けられるのは、浪人による外国人や要人に対する襲撃事件が頻発した幕末期のことである。イギリスの初代駐日公使として開国直後の日本に赴任した Alcock は、1863年に出版された *The Capital of Tycoon* の中で、数々の外国人襲撃事件や桜田門外の変など、浪人たちの起こした事件にふれたうえで、敵討ちである「忠臣蔵」を礼賛する日本人の精神を外国人襲撃の遠因と見て、主君の敵に対する奇襲事件が多様な媒体を通じて日本人に長い間愛好されていることを危険思想の温床であると否定的に紹介した<sup>⑥</sup>。

本稿においてとりあげるのは、英語圏での「忠臣蔵」受容に特に大きな影響を与えた Algernon Bertram Freeman Mitford の *Tales of Old Japan* における歴史事件としての紹介、Frederick Victor Dickins の『仮名手本忠臣蔵』の翻訳、斎藤修一郎と Edward Greey による『いろは文庫』の三編である。

1866年から1870年まで日本に英国公使館員として赴任した Mitford による紹介は、Alcock の見解の影響が残る1867年から1870年にかけての時期に執筆された。しかし、Mitford は、討ち入り事件を、終始、肯定的な視点からまとめている。*The Forty-seven ronins* と題されたこの記事は、1870年にイギリスの学術雑誌 *Fortnightly Review* に発表されたあと、1871年にイギリスで出版された *Tales of Old Japan* の冒頭を飾る挿話として掲載された。アメリカでも再版され版を重ねながら、さらにドイツ語やイタリア語への重訳もなされており、多くの読者を獲得した。

討ち入り事件に基づいたフィクションのなかで最もよく知られた芝居『仮名手

本忠臣蔵』は、はじめはイギリス海軍の軍医として、のちに弁護士として赴任した Dickins によって初めて英訳された。彼はイギリスに帰国していた1867年から1870年にかけて『仮名手本忠臣蔵』の翻訳に着手し、1875年に Chiushingura or The Loyal League として出版された。

1876年から1881年に東京大学からの国費留学生としてボストン大学法学校およびボストン大学に学んでいた斎藤修一郎は、日本美術商 Edward Greey に協力を依頼し、為永春水『いろは文庫』の翻訳を行った。この成果は、1880年にニューヨークで出版され、翌年には早速フランス語での重訳も出版され、アメリカだけでなくヨーロッパでも広く読まれることとなった。

これらの紹介・翻訳について取り扱った先行研究は、主に通時的な分析とそれぞれの紹介・翻訳に対する分析とに分けられる。太田昭子氏 (1991)<sup>⑦</sup>、宮澤誠一氏 (2001)<sup>⑧</sup>、Aaron Cohen 氏 (2003)<sup>⑨</sup>らによって、1860年代以降の「忠臣蔵」の欧米での受容について通時的な分析が行われ、日本と西洋諸国の進展とともに、日本人の内面や日本という国への関心が変化し、復讐劇という西洋諸国との共通性を持つ一方で侍や切腹といった異国性も併せ持った忠臣蔵の受容がその関心の変化をよく象徴していたことや、紹介者・翻訳者たち、ならびに読者の関心の推移や「忠臣蔵」への評価の変遷が明らかにされてきた。その変遷は、初期の受容では問題視されて注意も引いていた討ち入り事件の残虐性が時代が下るにつれて注目されなくなり、代わりに、浪人たちの行為を愛国心や自己犠牲として読みかえていく方向へと変化するというかたちで表れたことが指摘されてきた。それぞれの紹介・翻訳については、Mitford の紹介については横山俊夫氏 (1982)<sup>⑩</sup>、Dickins の『仮名手本忠臣蔵』の英訳については川村ハツエ氏 (1997)<sup>⑪</sup>、斎藤と Greey の『いろは文庫』の英訳については木村穀氏 (1960)<sup>⑫</sup>によって、各紹介・翻訳のそれぞれの本文の分析や、原典との比較によって、それぞれの紹介・翻訳の背景や「忠臣蔵」に対する認識を踏まえてその特徴が論じられてきた。そのなかで、横山氏は Mitford の従来までの日本文化紹介に対する批判意識を指摘し、木村氏は斎藤・Greey について、従来ま

での「忠臣蔵」の海外での受容に対して批判的であったことを指摘している。しかし、そうした先行する受容への批判的な意識が彼らの記述に具体的にどのように表れているのかという問題については触れられていない。

本稿では、「忠臣蔵」の中心的な要素である大石（大星）の人物像を最初期の紹介・翻訳がどのように形成していったのかという問題に限定して具体的な記述から分析することによって、それらの間の影響関係について考え、受容の様相を明らかにしたい。

## 2. Mitford, Dickens, 斎藤および Greey の赤穂浪人たちに関する認識

それぞれの比較に入る前に、紹介者・翻訳者たちが「忠臣蔵」をどのように認識していたのかについて、本文や、翻訳の序文に書かれた内容から踏まえていきたい。

Mitford は、歴史事件としての討ち入り事件の経緯をまとめることを宣言<sup>⑬</sup>し、浪人たちの切腹までを語り終えると、次のように彼自身の印象と日本人の「忠臣蔵」への認識を述べている。

A terrible picture of fierce heroism which it is impossible not to admire. In the Japanese mind this feeling of admiration is unmixed, and hence it is that the forty-seven Ronins receive almost divine honours. (p.681)

（猛々しい英雄像の強烈なイメージは称賛せずにはいられない。日本人の心のなかで、こうした称賛の気持ちは混じり気のないもので、そのため、四十七人の浪人たちはほとんど神のように敬われている。<sup>⑭</sup>）

Mitford の紹介態度は、この言葉に象徴されるように、Alcock が危険視したような、襲撃事件としての血なまぐさい印象を真っ向から否定するのではなく、そうした事件の背景に宿る日本人の英雄像が西洋人読者に理解されるようにつとめるものであった。先行研究においては、Mitford の記述には美化、誤訳が

多いと指摘されているが、それらの中には、この紹介態度と照らし合わせて考えると意識というべきものも含まれている。

Dickins は、『仮名手本忠臣蔵』の英訳 *Chiushingura or The Loyal League* の序文のまさに冒頭で、『仮名手本忠臣蔵』の日本での人気や物語の志向について、“The “Chiushingura” is, or at least was, one of the most popular and best-known romances in Japan. (『忠臣蔵』は、日本で最も人気があり、最もよく知られた物語の一つである、もしくは少なくともそうであった。)”、“the main object of the tale being to glorify “chiushin” or loyalheartedness, the supreme virtue of the Bushi class under the old order of things that passed away with the year 1868. (物語の主目的は、1868年とともに遠ざかった古い道理の下の武士階級の最上級の美徳である「忠心」を褒め称えることにある)”と述べており、現在の日本よりも明治以前の過去のものとして強調した。Dickins は、つづけて、英題の由来について述べている。

“Chiushin” may mean either “loyal-heartedness” or “loyal followers”; and “kura” (gura) signifies a treasury or storehouse, while it is also the first half of the name of the popular hero, Kuranosuke, of the historical episode of the “Forty-seven Ronin,” upon which the romance is founded, and which has been so pleasantly told by Mr. Mitford in his admirable “Tales of Old Japan.” The translator, therefore, without attempting to render the native title, has chosen that of “The Loyal League,” as fairly indicating the nature of the story, and preserving as much of the spirit of the original title as could be preserved in a single expression. (p.iii)

(「忠臣」は「忠誠心を持ったもの」や「忠義な家臣たち」のどちらも指していると思われ、「蔵」は宝物庫や倉庫を意味する一方、この物語が依拠しており、Mitfordによって好ましく語られた Forty-seven Ronin の歴史的な逸話の人気のあるヒーローである内蔵助の名前の初めの半分でもある。

それゆえ、翻訳者は、原題を維持しようとはせず、物語の性質を明らかに示しつつ一つの表現のなかに原題の精神をできる限り多く残している *The Loyal League* を選択した。<sup>⑮</sup>)

この引用部分からは、Dickins が Mitford の *Tales of Old Japan* における紹介を認識していたことがわかるが、Dickins は同時期に発表されて欧米で絶大な認知を受けていた Mitford の *The Forty-seven Ronins* にこれ以上言及することはなかった。いずれにせよ、英題である “*The Loyal League*” について述べられた部分からは、Dickins の翻訳態度が意味を忠実に訳出することに重点をおくものであったことが分かる。

1880年に出版された *The Loyal Ronins* には、斎藤修一郎、Edward Greey の二人の翻訳者それぞれによる序文が付されている。斎藤の序文には、『いろは文庫』を選定した理由や翻訳の経緯が述べられているが、そのなかで “It is true, in “Mitford’s *Tales of Old Japan*,” something has been related of the social condition of the people ; but as an example of Japanese literature, the book possesses little value (もとよりミットフォードの “*Tales of Old Japan*” は、いくらか日本の社会状態を伝えはした。しかし日本文学の見本としては、あの書は大した価値をもっておらぬ。<sup>⑯</sup>)” と、Mitford に対する批判的な態度をはっきりと打ち出している。また、『いろは文庫』を翻訳対象として選定した理由については、第一の理由は為永春水が日本で最も名前の知られている作家の一人であること、第二の理由は、封建制度下の日本人の生活相を伝えている点であると同じ序文の中で述べていた。また、「忠臣蔵」については、

Notwithstanding many misrepresentations and expressions of disgust heaped upon Roninism, I feel sure those who have written upon the subject have only seen “one side of the picture.” While I am the last person to defend lawless acts, I cannot avoid feeling a certain admiration

for the much-despised institution, believing that it contained the germ of patriotism. (p.vi)

(浪人主義に向っては、多くの誤解や反感が蝟集しているが、それは、この問題について書いた人が、楯の反面しか見ないからである。私は、法律無視の行為を弁護する気は毛頭ない。が、このひどく軽蔑せられている組織に一種讃嘆の念を禁ずることができない。たしかにこの中には、愛国心の芽生えが見られる。)

従来の欧米における無法者の襲撃としての否定的な見解に注意しながら、自身の肯定的な見解について、「愛国心の芽生え」が見られることを称賛の対象としてあげている。

また、それぞれの紹介・翻訳の序文で宣言された紹介・翻訳の姿勢についても違いがある。Mitford は、泉岳寺を訪ねて閲覧した大石内蔵助直筆の建白書などの文書や来日中に収集した情報をもとに討ち入り事件を要約し、Dickins は『仮名手本忠臣蔵』をもとに翻訳した。一方、斎藤・Greedy は、『いろは文庫』の翻訳ではありますが、Edward Greedy による序文には、時系列や話の関連性に依らない『いろは文庫』の構成のままでは読者に躓きがあることを危惧して、順番を入れ替え、『誠忠義士銘々伝』『赤穂四十七士伝』の二書によって筋の飛躍を補ったこと、さらに脚注をつけない方針でいることが述べられていた。

### 3. 大石内蔵助（大星由良之助）の人物描写

まず、大石内蔵助に関するそれぞれの最初の描写を比較したい。Mitford の The Forty-seven Ronin における大石に関する最初の言及は、次のものである。

This Oishi Kuranosuke was absent at the castle of Ako at the time of the affray, which, had he been with his prince, would never have occurred; for, being a wise man, he would not have failed to propitiate Kotsuke no Suke



by sending him suitable presents; (p.673)

(この大石内蔵助は、もし彼がその君主のそばにいたなら絶対に起こらなかったであろう乱闘の時、赤穂の城におり不在であった。彼が賢い人物であったことを考えると、上野介にふさわしい進物をささげることによって満足させることを怠ったりしなかったであろう。)

浅野内匠頭と吉良上野介との騒動を防ぐことができていたかもしれないと考えると不在が惜しまれる存在で、その争いを避けるために賄賂を贈ることをためらわなかったであろう人物として描いている。

一方、仮名手本忠臣蔵を忠実に翻訳することを序で宣言していたDickinsは、大石(『仮名手本忠臣蔵』では大星)自身について初めて言及される早野勘平の「お家の執事大星由良之助殿、いまだ本国より帰られず、帰国を待つてお詫びせん。」というセリフについて、“Our master’s chief councillor, Ohoboshi Yuranosuke, is away at our lord’s estates in the provinces. I must wait for his return, and will then implore pardon from him for my disloyal negligence. (p.75) (我々の主君の執事、大星由良之助は、主君の地方の領地にいる。私は彼の帰りを待たなければならない。そして私の不忠な怠りについて、彼からの許しを請うつもりだ。)”と、ほぼそのままに訳出し、注や説明などを付加せず、Dickinsの認識に合わせて読者の印象を誘導しようとする意図は見られない。

斎藤・Greedyの翻訳は、いろは文庫の本文①の文脈の上に本文②の内容を付加し、大石(大星)に関する最初の言及について、主に二つの記述から訳文を作った。『いろは文庫』本文と訳文との対応は、下記引用部分に施した下線、破線、影付きの部分によって示した。

#### 【『いろは文庫』本文①】

未然に察する大星まで越度の様に後の人の批判をこそ悔しけれ。偕も  
大星由良之助は此度主君の御役義を仰せかふむり給ひしこと国元にて聞よ

りはやく、(第二十五回)

【『いろは文庫』本文②】

蜀山人聞書文庫とか題号せし偽書なりとかおぼゆ。大星が仇討の存念、…其主君判官の短慮にして事を不成を知らぬ事はあるまじ。また、師直の貪欲を知らざるは不明なり…苟も其氣質を知らざれば其身は城を守りて外に出る事能はずとも…才智の者を密かに鎌倉へ下らしめ金銀財帛を持せて(第二十九回)

【斎藤・Greedy 訳】

Sir Big-rock, chief councillor of Lord Morningfield, was less fortunate. When he heard his chief had been appointed one of the officials to receive the commissioners he felt troubled, knowing, as he did, the reputation of the upstart Kira, besides which, being in charge of the castle of Ako, in the province of Harima, distant nearly three hundred miles from Yedo, he could not leave his post and personally propitiate the Master of Ceremonies. (p.22)

(浅野の執事、大石はさらについていなかった。主が御使いを迎える役の一人に任じられたと聞いた時、彼は嫌な予感がした。成り上がりの吉良の評判を知っていたからだが、それでも、大石は江戸から三百マイルほど離れた播磨国の赤穂城に詰めており、役目を置いて、個人的に儀礼の長の機嫌をとることはできなかった。)

この箇所の翻訳で特に注目したいのは、斎藤・Greedy の翻訳では、いろは文庫に描かれている「其主君判官の短慮にして事の不成を知らぬ事はあるまじ」という、大石が主君浅野内匠頭の気が短いことを知らぬはずがないという部分が削除され、嫌な予感がした、という表現にとどめている点である。このあと、本文①の文脈に沿って大石が50両の賄賂を吉良へ届けさせる場面が描かれるが、その賄賂は手違いによって届かず、大星は、有能だが報われない家臣として登

場することになる。大星が浅野内匠頭の性格について長所も短所もよく理解しているという設定は、主君を幼い頃から知る近臣としての親密な主従関係を物語るはずのものであったはずだが、『いろは文庫』からこの箇所には吉良の悪評のみを訳出し、主君の短所を訳出しない点には、「忠臣蔵」事件に「愛国心」の美点を見出している斎藤の意図を感じざるを得ない。

Mitford の紹介に美化の傾向が見られると指摘される一因をなしていると思われる箇所がある。それは、吉良邸への討ち入りの直前に大石が浪人たちを前にして行った以下の言説についてである。

Then Oishi Kuranosuke addressed the band, and said: —

“To-night we shall attack our enemy in his palace; his retainers will certainly resist us, and we shall be obliged to kill them. But to slay old men and women and children is a pitiful thing: therefore, I pray you each one to take great lest you kill a single helpless person.” (p.676)

そして大石内蔵助は一同に向かって言った。「今夜我々は敵の屋敷を攻撃する。彼の家臣たちはきっと我々に抵抗するだろう、そして彼らを殺さなければならぬ。しかし老人や女子供を殺すのは哀れなことだ、一人の無力な者も殺すことがないように大いに気を付けてくれるよう、君たち一人ひとりに願う」

Mitford は、討ち入りを前に好戦的な言葉ではなく、弱者への配慮を求める大石を描いている。また、この箇所では注目したいのは、大石は浪人たちに命令をするのではなく、討ち入りを行う「我々」つまり「同志」の一人として申し出る形をとらせている点である。『仮名手本忠臣蔵』にもこの場面に相当する箇所がある。浄瑠璃本文では「郷右衛門と某は、裏門より込み入って、合図の笛を吹くならば、時分はよしと乗り込めよ、取るべき首はたゞ一つと、由良之助に下知せられ、(p.153)」とあるのを、Dickins は、

“Comrades,” cried Yuranoske, turning to his companions, “…while Goyemon, with myself, will force the rear entrance. At the right moment, a loud whistle will be heard let every one then rush to the attack ; there is but one head we have to take.” (p.150)

「同志たち」由良之助は仲間たちを振り返って叫んだ。「郷右衛門と私は裏門を責める。大きな笛の音が聞こえたら、まさにそのときにそれぞれ攻め入るように。我々がとらなければならない首はただ一つだ」

と、基本的には文意に忠実に訳をしている印象を受ける。しかし、浪人たちに對する“comrades (同志たち)”という呼びかけは、大石の言葉を「下知せられ」たものとする浄瑠璃本文から、浪人たちと大石との關係についての改変の意図が見え、この点では Mitford と同じ方向に手を加えているといえる。

『いろは文庫』本文に比較的自由に手を加える斎藤と Greey の翻訳では、文脈としては『いろは文庫』に依拠して、「大石が定めたる手配夜討内試の書面／一 相音を違ふべからず。是討入の肝要なり。／是山鹿流の陣太鼓九度一返の打切を合図とし、追手弱手一同に合図の笛を吹きならす。… (第二十一回)」で始まる、討ち入りに際して大石が出した、全部で15箇条の指示書を以下の部分を訳出しているのであるが、

The following instructions, issued by Sir Big-rock, were copied from the original document, preserved to this day in the Spring-hill Temple :

…15. When Sir Kira is found, his captors must blow three prolonged blasts upon their whistles, to which every one will respond, then all will assemble on the spot where he is discovered.

16. Do not kill women or children or any of the enemy who are unarmed.

(大石によって出された以下の指示は、原本から写され、今日まで泉岳寺に保管されている。

15. 吉良公を見つけた時には、捕らえた者たちが三度長く笛を吹かなければならない、その音に全員が反応し、彼が発見された場所に皆が集まる。
16. 女子供や武装していない敵は誰も殺さないように。)

下線部のように、『いろは文庫』にはない命令を一条付け加えている。この弱者に対する大石からの配慮は、明らかに Mitford の紹介からの影響が読み取れるが、Mitford の呼びかけが同志に対して要請する形をとっていたのに対し、引用部では明白な命令口調が用いられており、大石と浪人たちとの間に存在した上下関係の存在を訳の上にも再現したと考えられる。

### おわりに

ここまで、三つの紹介・翻訳の比較を行ったことにより、Mitford の意識の方向性に、斎藤・Greedy の翻訳が表向きには批判しつつも、訳文の上では踏襲していたという事実が明らかになった。Mitford と Dickens については、大石と浪人たちとの関係性について、『仮名手本忠臣蔵』の本文からも分かる日本における上下関係としての理解ではなく、「同志」として訳出するという類似性が明らかになった。しかし、Mitford と Dickens は「忠臣蔵」の見方を左右する「浪人」の語の定義についての見解に違いが見られる。Mitford が “It is used to designate person gentle blood, entitled to bear arms, having separated from their feudal lords by their own act, or by dismissal, or by fate,…” (p.669) (自らの行いや解雇、または悲運によって主君から隔てられた、帯刀を許されるよい生まれの者を指す)” と、選ばれた階級である武士社会の一員として「浪人」を定義づけたのに対し、『仮名手本忠臣蔵』および「忠臣蔵」の旧時代的な面に着目した Dickens は、“Clansmen dismissed from, or who had abandoned, the service of their master; lit., “Wave-men;” i.e., “Vagabonds”. (p.40) (その主君への奉仕から解雇された、もしくは放逐された藩士。字義としては「波の人」すなわち「放浪者」)” と、主従関係と同時に武士社会からも切り離された野武

士のように説明している。この二人が必ずしも同じ「忠臣蔵」観を共有していたというわけではないという点を「浪人」という語に付された二人の注から最後に指摘しておきたい。

### 【注】

- ①服部幸雄は、「仮名手本忠臣蔵とその時代」（服部幸雄編『仮名手本忠臣蔵を読む』吉川弘文館 2008年、pp.1-29）のなかで、「『忠臣蔵』ということばと概念が、史実と虚構を織り交ぜた一つの「文化的世界」を表象して」いと定義している。
- ②福本日南『元禄快挙録』明治42年、啓成社
- ③Cohen, Aaron M, (2008), “*The Horizontal Chushingura: Western Translations and Adaptations Prior to World War II.*” *Revenge Drama in European Renaissance and Japanese Theatre*, Edited by Kevin J. Wetmore, JR, New York: Palgrave Macmillan, p. 154
- ④Titsingh, Isaac, (1820), *Mémoires et Anecdotes sur la Dynastie régnante des Djojouns, Souverains du Japon*, Paris: Nepveu. p.39
- ⑤The Mid night Folk (『夜に出歩く者たち』)、*The Box of Delights* (『喜びの箱』)などの児童文学や詩集 *Salt-Water Ballads* (『海水のバラッド』)などで知られる John Masefield は、Mitford の「忠臣蔵」紹介に主に依拠しながら1915年に戯曲 *The Faithful* を発表し、ロンドンやニューヨークで上演され、好評を得た。この戯曲は、後年、小山内薫によって日本語訳され、築地小劇場において上演された。
- ⑥Alcock, Rutherford, (1863), *The Capital of Tycoon: a narrative of three years' residence in Japan*, New York: Harper and Brothers, p.359
- ⑦太田昭子 (1991)「忠臣蔵の世界——英語訳にみられる変容過程」『教養論叢』(88)、pp.1-28
- ⑧宮澤誠一 (2001)『近代日本と「忠臣蔵」幻想』、青木書店
- ⑨注③に同じ。
- ⑩横山俊夫「A.B. ミットフォードによるイギリスへの日本紹介——1869年～72年を中心に」『人文学報』53 (1982)、pp.47-72
- ⑪川村ハツエ (1997)『F. V. ディキンズ——日本文学英訳の先駆者——』七月堂、pp.50-97
- ⑫木村毅 (1960)『日本文学交流史の研究』講談社、pp.326-350
- ⑬Mitford は、*The Forty-seven Ronins* について、討ち入り事件の“transcribe”であると述べている。(注⑭、p.670)
- ⑭The Forty-seven Ronins 引用に際しては、初出に拠り、引用者による和訳を付した。Mitford, Algernon Bertram. “*Tales of Old Japan. No.I.:The Forty-seven Roninns*”, *Fortnightly Review* 41 (1870), pp.668-684.
- ⑮Dickins の『仮名手本忠臣蔵』英語訳の引用は、以下に拠り、引用者による日本語訳を付した。Dickins, F. V., (1875 [1st ed]), *Chiushingura or The Loyal League : a Japanese Romance*, London: Allen & Unwin
- ⑯Loyal Ronins からの引用については、Saito, Shuichiro, and E. Greey, (1880), *The Loyal Ronins*, New York: Putnam & Sons に拠り、序文の日本語訳については、注⑯における木村毅氏による訳を引用し、訳文については引用者の日本語訳を付した。

## \* 討論要旨

板坂則子氏は、浄瑠璃の『仮名手本忠臣蔵』と人情本の『いろは文庫』を「忠臣蔵」として同列に扱うことには問題があるのではないか、と指摘した。また、浄瑠璃特有の約束事に基づいた『仮名手本忠臣蔵』のようなテキストが、海外においてどのように紹介され、受容されたのかと質問した。発表者は、今後は原典の違いを考慮したうえで、翻訳されたテキスト間の相違を明らかにしていきたい、と回答した。また、翻訳されたテキスト間の相違についても、Mitfordと斉藤およびGreedyの翻訳が一般読者向けのものであったのに対して、Dickinsは学術的な翻訳を目指していたために生じた面があると述べ、この点も考慮したうえで分析していくつもりである、と補足した。

大高洋司氏は、翻訳者たちが『いろは文庫』のどの版をもとにして翻訳したのか、と質問した。発表者は、斉藤およびGreedyは中村屋幸蔵版に拠っているが、他の版も参照している可能性がある、と回答した。大高氏はそれを受けて、原典を特定する作業は困難が予想されるが、翻訳者たちが「忠臣蔵」をいかに受容し、欧米へ伝えたかということを明らかにするためには重要な手続きである、と述べた。